

## Pre-OJT (on the job training) としての 連携総合ゼミの機能について: 事例 14 の実 践を通して考える

桑原桂<sup>1)</sup>、松井由美子<sup>2)</sup>、久保雅義<sup>3)</sup>、石上和男<sup>4)</sup>

- 1) 新潟医療福祉大学 言語聴覚学科
- 2) 新潟医療福祉大学 看護学科
- 3) 新潟医療福祉大学 理学療法学科
- 4) 新潟医療福祉大学 医療情報管理学科

【背景・目的】新潟医療福祉大学は、現在6学部13学科ある保健・医療、福祉、スポーツの総合大学である。その長所を生かして学部・学科の枠を超えて学ぶ「連携教育」を実践している。連携総合ゼミは、4年次に開講され、1年次から学年に応じて進んできた全学共通の連携教育コアカリキュラムの集大成として位置付けられている。

連携総合ゼミに参加した学生たちは、他職種間連携に必要な、対象者を中心に考える姿勢、チームメンバーとして相互理解を深める態度、等を参加型体験学習を通して実践し、身につけることができる。また実際の臨床現場に即した協働実践を行うためになるべく多くの種類の事例を様々な形(ビデオ症例、仮想症例、実際の患者、模擬患者)で提供している。こうした参加型体験学習は、実際の医療現場で働く立場となった時に即座に活かせる知識、技術、技能、態度を習得する大きなステップとなり、Pre-OJTの役割も担っている。

2016年度に新たに加わった事例と学生たちの取組を紹介し、連携総合ゼミのPre-OJTとしての役割について考察する。

【方法】2016年9月5日から9月9日の5日間行われた連携総合ゼミでの事例14の内容と学生たちの取組について紹介する。

【結果】2016年度の参加大学は台湾から1校、フィリピンから2校、日本から3校の計6校で、全参加人数は、学生87名、教員44名であった。そのうち事例14には、フィリピン人学生6名、日本人学生3名の合計9名の学生とファシリテーターとしてフィリピン人教員1名、本学教員4名の合計5名の教員が参加した。

事例14は、近年のグローバル化の波の中で、QOLサポーターとしてこれから活躍する学生たちには、「日本で生活する外国人が医療サービスを受ける場面に対応できる医療従事者となること」が求められているのではないかと、いう学長からの提案を受け、新たに作成された事例である。そこで筆者は、新潟県の聾学校の教員たちからよく受ける相談として、外国籍の母親への対応があることを思いだし、事例を作成することにした。

新潟県では、農業を主として行っている地域の自治体の

多くが、少子高齢化を避けるために外国籍の女性たちを農家の嫁として迎える取り組みを行っている。そのため筆者は外国籍の母親が難聴児を育てているケースの相談を受ける経験を数多くしてきた。その経験の中から、架空のケースを作成したのが事例14である。この事例14は、今年度から「連携教育用仮想事例教材」の在宅・地域支援系教材として新潟連携教育研究センターのホームページ(<http://www.nrecipe.net/material/>)から閲覧できる。

難聴児を抱えるフィリピン人の母親支援の事例についてフィリピン人学生と共に英語で議論を行い、英語で意見をまとめていった。フィリピン人学生は全員5年生で、実習にて他職種間連携の経験もある。そのため、ICF(国際生活機能分類)を使った支援評価を行い、日本において可能なサービスに関して、日本人学生から情報を得ようと働きかけてくる。その結果をホワイトボードや模造紙にしてまとめ、日本人学生は日本語で書き直しながら、互いの理解を確認し合った。

日本人学生はフィリピン人学生より人数が少なく、英語での議論に不慣れなため、積極的に意見が言えず大変苦労をしていた。また筆者がいるときは、通訳をしていたが、通訳を介した意見交換は議論のリズムを崩し、難航しがちになる。しかし、日本人学生たちにとって、外国籍の母親がことばも通じない中、難聴児を育てる困難さと、グループディスカッションを英語でやる困難さを重ね合わせ、外国籍の母親に対して共感を得られたことは、今後、QOLサポーターとして働くうえで重要な体験であった。

【考察】この事例のように外国籍の方が治療や支援を受けに医療機関や支援機関を訪れる機会はグローバル化が進んだ現在では、予想以上に多い。今回のようにフィリピン人学生たちと実際にことばや文化の違いを感じながらのグループ討議は難渋することが多かった。そのような中でも情報共有がなされているかの確認を絶えず行う必要がある。昨年度はフィリピン人学生たちが主導となり、模造紙、ホワイトボード等を使い、図示することで情報共有の確認を視覚的にを行い、日本人学生からの意見を今期強く取り入れるように気を使っていた。

こうして、参加学生たちは自分の力で事例を通して協働作業を行い支援策を検討し、まとめ、発表していく。この事例では、情報共有の困難さを経験しながらも学生たちが自ら工夫しながら、問題解決をはかり、最終日の発表につなげていった。この経験は実際の医療現場では自身がチームの一員として協働作業を行っていく力となる。

【結論】2016年度に新しく導入された事例を通して、連携総合ゼミのPre-OJTとしての役割に関して考察を行った。参加学生たちの情報共有の工夫は、学生自らが生み出したものであり、今後実際の臨床現場でチームの一員としての役割を自身で考える時に役に立つと考えられる。